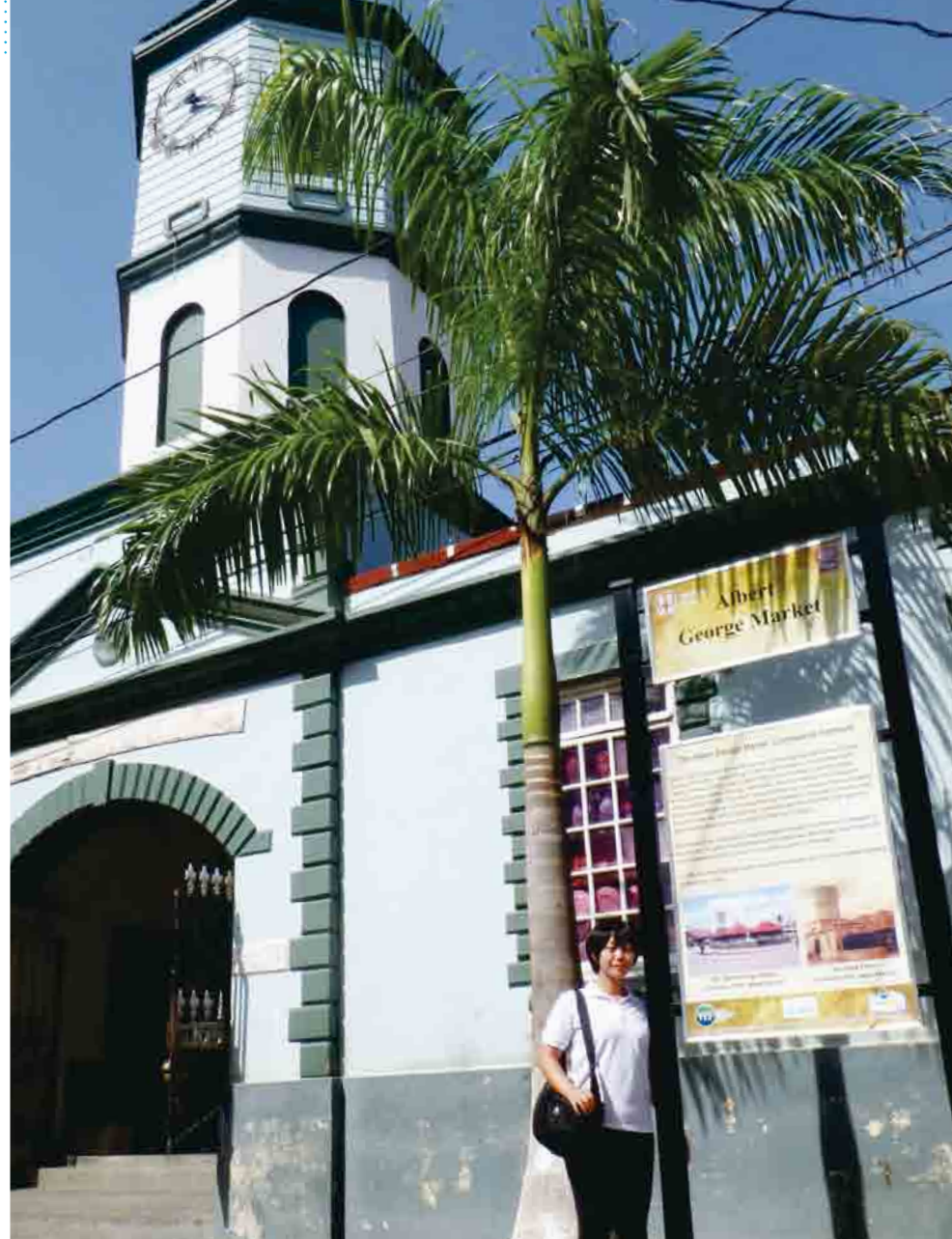


# 塚元夢野

from  
Jamaica



つかもとゆめの  
1988年、新潟県生まれ。2011年、横浜国立大学卒業後、東日本旅客鉄道「JR東日本」入社。新潟県新潟駅で駅員、新潟県周辺全区域で車掌として勤務。鉄道の街を掲げて地域活性化に取り組んでいた新津では、鉄道まつりの開催地、PR事業などに携わる。新潟県のアートイベント「大地の芸術祭」では、ボランティアのツアーガイドとしても活動。16年6月から18年6月まで青年海外協力隊の観光隊員としてジャマイカに派遣される。現在「JR東日本」に戻っている。



塚元さんの提案の場所に設置された観光案内板

## できることを広げていけばいい

地域を活性化する観光の在り方を考えた2年間

ビーチリゾートとして海外から多くの観光客が訪れるジャマイカにも、観光と地域振興が繋がらないという課題があった。観光隊員として派遣された塚元夢野さんは、2年間悩みながらもジャマイカの観光と真摯に向き合ってきた。

新潟県で鉄道会社の社員として取り組んだ観光による地域振興と、ボランティアとして活動したアートイベント「大地の芸術祭」のツアーガイド、この二つの経験から、「海外で観光による地域振興ができないか？」と考えていた塚元さん。調べて見つけたのが、会社に籍を残したまま参加できる青年海外協力隊だった。しかも観光分野での募集があり、地域活性化にも関わることがわかり、すぐに応募した。

当初の派遣予定国はエルサルバドルだったが、派遣の4か月前に治安悪化のため中止に。そこで急遽決まったのが、同じ時期での派遣が可能だったジャマイカだった。「ジャマイカのイメージは、レゲエ、ウサイン・ボルト、ブルームウンテンコーヒークらい。ジャマイカの位置とネット情報だけを確認し、派遣前訓練を終え、気づくと飛行機に乗ってしました」という塚元さんの言葉からは、当時のあわただしさと不安が感じられる。

### 自分の存在意義に悩む日々

2016年6月、塚元さんはジャマイカ北部にある港町ファルマスに赴任した。ファルマスはジャマイカの観光省が力を入れている地域で、14年には同国最大のクルーズ港となった。しかし一方で、街中では歴史的建造物の破損や路上のごみなど多くの課題があった。「ツアーの多くが欧米資本によるもので、地元住民の

場所を塚元さんがしっかりと把握していたところ、「ありがとう！ あなたがサポートしてくれてよかった」と言われたり……。小さなことだが、「ああ、存在意義などとそんなに難しく考える必要なかったのかも。今はできることをやってその範囲を少しずつ広げていけばいいんだと気がついて、肩の荷がスツと下りた」という。

### 最後まで意欲的に技術の普及に努める

塚元さんは任期中最後の仕事として、ジャマイカの素材を使った草木染めの技術の普及に取り組んだ。きっかけは、一緒に活動していたファルマス工芸品組合の代表ジョーイ・ラシュさんの「天然素材を使った地元産品を観光客にも、もっと広めたい」というひとこと。塚元さんがコーディネーターとなり、ジャマイカ



上:最後の仕事として草木染めのトレーニングに取り組んだ  
下:こんな染物が完成! みんな紋りの柄がきれいに出た

他の地域で草木染めを教えた環境教育隊員を指導者に、商品開発を担当していたシニアボランティアを助言者としてワークショップとトレーニングを企画した。「任期終了まで3か月を切っただけで、任期中に形になるかはわかりませんでした。配属先のクラブと部門と連携し、将来につながる活動になっほしい」と最後まで意欲をみせた。「ジャマイカのような観光国では、人の暮らしの多くの領域に観光産業が関係している、観光税で整備された地域もたくさんあります。地域住民に観光が自分の生活に役立っている実感してもらい、持続可能な方法で開発を進めていくことが大切だと、あらためて感じました。JR東日本に戻ってから、この2年間の経験を活かして日本で過疎地域と観光客をつなぐ地域を活性化することにに関わり続けていきたいです」



観光案内板の設置場所を同僚と一緒に調査。思うように進まず悩んだ時期もあった



左:ファルマスに残る歴史的建造物の多くは整備されていない  
右:欧米資本の会社がツアーを組み、ジャマイカ最大のクルーズ港となったファルマス

生活とは乖離してしまいました。また、急激な観光開発に住民の意識や環境整備が追いついていませんでした。塚元さんの配属先となった観光開発公社では、ファルマスを持続可能な観光の拠点とすることを目標に掲げていた。「文化遺産、建築遺産、人々の暮らしや習慣を観光開発に取り入れ、また市民一人一人が観光業で利益を得ている実感が持てるビジネスモデルづくりを目指し、観光の促進、住民の意識啓発、観光収入の向上の三つの柱で活動しています。塚元さんが取り組んだ仕事のひとつが、街の観光ポイントの歴史や価値を紹介す

る案内板の設置だった。勇んで現地調査をし、現状と今後の展望を報告書にまとめたものの、結果は大学生のレポート扱い。とても落胆したそう。設置場所もころころと変わり、「私がいる意味ないじゃん、もう勝手にやってくれ」と、何度か思いました」と当時を振り返る。自分の存在意義を見いだせずに、悩む日々が続いた。それでも最終的に塚元さんが提案した場所に観光案内板が設置され、「こっちはフォトジェニックだ」と言われたり、遺産エキスポの開催準備中、ブーシの配置